エジプトの Tokkatsu 実践からみえた日本の特別活動への示唆

○相庭　貴行　（筑波大学大学院生）
○添田　晴雄　（大阪公立大学）
○林　尚示　（東京学芸大学）
○山田　真紀　（椙山女学園大学）

１．なぜ Tokkatsu が受け入れられたか

(1) 日本との差異とイスラム教との親和性

今回の訪問調査により、エジプトと日本の特別活動の相違点が確認できた。エジプトの特別活動は掃除、学級会、日直当番が主であり、学級活動以外の児童会活動、クラブ活動、学校行事については、特別活動という認識は弱い。(エジプト訪問調査より)

日本社会に根差したウェルビーイングの要素（教育振興基本計画）を視座として、エジプトの２つの小学校の学級会を分析した。その結果、幸福感、学校や地域でのつながり、心身の健康、安全・安心な環境などについては、学級会における発言から該当箇所の特定に至らなかった。

一方で、協調性、利他性、多様性への理解、サポートを受けられる環境、社会貢献意識、自己肯定感、自己実現については、該当箇所が確認できた。(当日提示資料参照。)

日本の特別活動は必然性を持って受け入れられたとみることもできる。暗記中心、留年があり、理系の学力が低い状態から、集団や社会の形成者としての認識をもち、すべての子どもが批判的思考力を発揮できるようにスキルベースの学際的アプローチを導入する場合、日本の学級会等は適した活動型の教材である。エジプトと同様の関心を持つ国には、同様に受け入れられるかもしれない。エジプトと同様の価値観を共有するアラブ諸国にとって、学級会などは受け入れられる素地がある。イスラム教徒のコミュニティ（ウンマ）では、信徒ひとりひとりの見解の一致が重要視されるため、特別活動の「話し合い、合意形成、意思決定」は許容されやすいのかもしれない。(林)

(2) 社会構成主義的な学びの文化作り

児童どうしで話合うことによって学び合う文化が Tokkatsu の学級活動の導入を通してエジプトに定着しつつある。それは、「学級会」の活動にとどまらず、算数、理科、アラビア語などの教科の学習の文化にも影響を与えている。エジプトでは暗記中心の学習から、社会構成主義的な学び※への転換が Eduction2.0 で希求されているが、その原動力となっているのが、実は、Tokkatsu の学級活動の導入で得られた教師や児童の成功体験や「手応え」である。

1947 年の『学習指導要領（試案)』の中にある特別活動の原型は「自由研究」であるという捉え方は一面的であり、『学習指導要領(試案)』の児童生徒中心の経験カリキュラムのあらゆるところに、特別活動のルーツが見出されると捉えるべきである。その後、学習指導要領は教科中心カリキュラムに置き換わるが、児童生徒中心の経験カリキュラムの見方考え方を引き継いだのがその後の特別活動である。現在、日本でもエジプトでも、そして、世界の多くの国々でも、社会構成主義的な学び（日本では「主体的・対話的で深い学び」として）が注目されているが、その学習文化の基盤となっているのが、特別活動による学びの文化である。児童生徒中心の経験カリキュラムの遺伝子が特別活動や Tokkatsu の媒介によって、現在の社会構成主義的な学びに継承されていると考えられる。(添田)

※Eduction2.0 では、児童中心的でコンピテンシーベーストな学びへの転換が求められている。そこで求められるのは、デューイやヴィゴツキーの教育理論から連なる社会構成主義的学習観にもとづく学び方、つまり、人間は対話を通して学ぶという考え方に基づく学び方である。

２．子どものどのような資質・能力を育てるか

(1) 子どもの心理的ニーズを満たす

エジプトの Tokkatsu から見えてきたのは、Tokkatsu が子どもにとって従来の生活では十分に満たされていなかった心理的なニーズを共同的に充足するという役割を果たしていたということである。児童に対するインタビューからは、他の児童からリスペクトされるのがうれしい、人のサポートをできるのが楽しいといったことが語られた。近年のエジプトの学校は学力競争の激化を反映し、教師-児童の一方的な教え込みが中心であったため、児童どうしの関係は競争的なものとなりやすかったという。そのため、従来の学校では、自己肯定感や自己有用感といった児童の心理的ニーズは十分に満たされず、それらを満たそうとするために、他者にはなりふり構わず「我先に」という態度になりやすかった。一方で Tokkatsu は、児童が自己のニーズを満たす機会を他者と取り合うのではなく、同様のニーズを持った他者と一緒に自身の心理的なニーズを満たす経験を得る場となった。それによって、従来のエジプトの子どもの課題とされた、他者の意見を聞くことや、協力することといったことの価値を理解し身につける場となったといえるだろう。

このように子どもの心理的ニーズに焦点を当てて日本の特別活動をとらえ直すことは、重要であると考えられる。戦後初期において日本に取り入れられたアメリカのハイスクールにおける教科外活動も、生徒のニーズを「正しく」満たしていく活動として位置づけられつつ発達している。また、日本の特別活動における自治が果たす役割も、子どもの要求を充足するものともされてきた。いずれも、子どもや生徒の心理的なニーズが満たされずに「荒れ」や意欲の低下等が生まれたことから、ニーズを満たすための教育的活動が必要とされていたという側面を多かれ少なかれ有しているのである。エジプトの Tokkatsu からは、社会や文化を超えた Tokkatsu の意義を見出すことができると考えられる。（相庭）

（2）未来志向型コンピテンシーを育てる

エジプトの学級会での子どもの様子を見、学級会後の児童インタビューを聞いて、改めて学級会は以下の子どもの資質・能力を高める活動であることを実感した。「自分の意見を持つこと（意思決定）」「自分の意見を表明すること」「他者の意見を受け止めること」「出された諸意見（含理由）を比較検討すること」「少数意見にも配慮すること」「みんなが納得できる納得解を模索して合意形成すること」「見通しをもって物事を実現させる（役割分担・計画作り）」等。

これらの資質・能力、すなわち「共同的問題解決力」「協働性」「主体性」「企画力・実行力」等は、これからの社会を豊かに生きていくうえで必要不可欠のものであり、話合い活動が正しく機能するように導けたなら、話合い活動は未来志向型コンピテンシーの育成に大きく寄与するものであると感じる。

エジプトと日本に共通して、「みんなが納得できる納得解を模索して合意形成すること」が難しく、少数派にも配慮した「納得解」が本当に見いだせているのかが曖昧である話合いも多いが、それに近づけたときの喜びや達成感は大きい。「同調圧力」とならずに、みなが喜びと達成感を感じる学級会となるための要素を、これからもエジプトと日本両国が協力して見いだしていけたらと考えている。（山田）

謝辞：本研究は、令和 5 年度　文部科学省 EDU-Port ニッポン調査研究の助成を受けた。